Meisei University

明治以後の「赤い糸」

古田島洋介*

本誌第一～三号で論じてきた「赤い糸の伝説」について、今回は明治時代以降、現今に至るまでの情勢を概観し、若干の資料を補足する。

一

江戸時代にかなり普及したと推される赤い糸の伝説は、明治時代において、いわば知識人の常識となっていたようだ。たとえば、服部誠一『東京新繁盛記』（明治七―九年）に――

赤縄誤り結ぶ余輩の悪縁、死せずんば又何をか為さん。(1)

これは、築地の新富坊で演じられた恋愛劇の模様を記録した文章の一文である。夜半、少年と少女が手をたずさえて橋から身投げしようとした。たまたま通りかかった商人が、早まるなと二人を引きとめる。なぜ死に急ぐのかとたずねた商人に、少年は事情を説明する――相手の少女は自分が久しく教えを受けている塾の師の娘である。互いに慕い合って深い仲になったが、すでに師の知るところとなった。許されぬ仲とはいえ、手を切るに忍びなく、さりとて駆落ちするにも旅費がない。かくなるうえは死ぬより仕方がない――と。そして、少年が自分たち二人の関係を述べてみせたのが、右の台詞である。今日の耳を以てすれば、「赤縄誤り結ぶ余輩の悪縁」は許されぬ仲を表現する修辞として、なかなか雅びに響く。しかし、作者にとって、また、おそらく当時の観客たちにとっても、これは聞き流せるほど普通の台詞、つまり常識にすぎなかったのではなかろうか。少なくとも、現今と違い、ことさら注釈をほどこすような性質の字句ではなかったであろう。「ほら、月下老人が結んだとかいう……」と聞けば、すぐ「ああ、あれか」と思い当たる程度の知識であったと思われる。

西洋文学の翻訳を見ても、中国古典を典拠とする「赤縄」の語は一般になじみのあった語であろうと推測される。明治二十年、シェークスピア『ロミオとジュリエット』の翻訳として、木下新三郎（「春煙小史」と号す）『仇結奇の赤縄　西洋娘節用』が誠之堂から刊行された。一目瞭然、「赤縄」がそのまま表題に使われている。扉に見えるルビによれば、「仇結奇の赤縄」は「あたむすび　ふしぎのいろなは」と読むらしい。(2)「赤縄」を「いろなは」と訓ずるのは面白い趣向である。古語辞典の類を検しても「いろなは」は見当たらない。木下新三郎の案出だろうか。人名の漢字表記も面白く、たとえばロミオは「籠女男」（ろうめを）、ジュリエットは「濡鸚越都」（じゅりゑつと）などと記されている。「籠女男」には〈女を籠絡する男〉、「濡鸚越都」

明治以後の「赤い糸」古田島洋介　＊言語文化学科　専任講師　日中比較文学

NII-Electronic Library Service

Meisei University

には〈濡れぼそったコウライウグイスが都を越えてゆく〉意がこめられているか。

実際に本文を読んでみると、第二章の見出しに「双玉相対原連理／両心只有月老知」のごとく「月老」すなわち月下老人が見え、文中、「月下老人」には「むすぶのかみ」とルビが付されている。[3] 籠女男と濡鸕越都の恋愛関係は「籠る情のからまりて、離れがたなき縁の絲」[4]などと形容され、墓で息を吹き返した濡鸕越都に永遠の愛を誓う籠女男は次のような台詞を口にする。

如何なる悪魔があるとても、二人を繋ぐ赤縄を、断ちきることのあるべきや[5]

「赤縄」のルビは「あかなわ」。表題の「いろなは」と読みも仮名遣いも異なり、まさに自在な扱い方である。按ずるに、「赤縄」の二文字さえ記しておけば読者に誤解の余地はありえぬと踏んで、「いろなは」だの「あかなわ」だのと、いわば勝手気ままにルビをほどこしたのだろう。それほど「赤縄」の語が読者になじんでいることを当てにしていたように思われる。

一方、森鷗外にも「赤縄」の用例がある。『舞姫』ではない。太田豊太郎がエリスに向かって「赤縄の誤まり結べる我らが悪縁」と離別を説得してもよさそうなものだが、さすがにヨーロッパの空気を満腔に吸った鷗外の筆先からそのような文字は流れ出なかった。「赤縄」の語が見えるのは、『北条霞亭』（大正六／七―九年）六十九の末尾である。

霞亭の足は将に赤縄子の纏るを免れざらむとしてゐる。[6]

これは、霞亭が菅茶山から姪の井上氏敬との縁談を持ちかけられ（六十八）、すでに断りがたい状況にあったことを記した一文である。その後、霞亭は決心しかねて逡巡したが（七十六）、郷里の両親の意向を確かめたうえ（七十八）、ついに茶山の言に従って敬と結婚するに至る（七十九）。別して注目すべきところもない字句だが、「赤縄」と略さず、例の「定婚店」に見える字句をそのまま用いて「赤縄子」と記している点に、原典の字句を尊重しようとする鷗外の生真面目な姿勢が彷彿とするようだ。[7]

二

以上、わずか三つの例にすぎないが、明治から大正にかけての状況を瞥見してみた。少ない用例から推測をめぐらすのは気がひけるものの、おそらく漢学の伝統がなお確乎と息づいていた当時にあっては、月下老人が「赤縄」を結んだ「定婚店」の話なぞ、中国物の通俗故事として、一種の常識にすぎぬものであったろうと思われる。

ただし、ここまでは中国古典の原文「赤縄」もしくは「赤縄子」のまま記されているのが実情で、これを「赤い糸」と呼んだ例は見当たらない。一体いつから「赤縄（子）」が「赤い糸」に変わったのだろうか。

すでに本誌第一号の拙稿で、大正も末に近くになったころ（大正十三年）、柳田国男が「紅の紐（くれないひも）」という言い方を用いていることを紹介した。ここに再掲すれば――

NII-Electronic Library Service

Meisei University

国語なり地理、歴史なりは、これによって同時に生徒を日本の好き青年たらしめ、さらになお将来の「好き日本人」たらしむるために、特に設けられている科目である。諸君を日本の国土と繋ぐ紅の紐である。[8]

すでに前掲のときに論じたごとく、この「紅の紐」はおそらく「赤縄」を踏まえた語で、男女間の関係を表わす原義が拡張されて、単に運命的な関係を表わしているものと見てよいだろう。しかし、まだ「赤い糸」とは呼ばれていない。残念ながら、今のところ管見に入った「赤い糸」の語の初見は、やはり本誌第一号に引いた太宰治の短編小説「思ひ出」（昭和八年）に見える用例である。これも再掲すれば

秋のはじめの或る月のない夜に、私たちは港の桟橋に出て、海峡を渡つてくるいい風にはたはたと吹かれながら赤い糸について話し合つた。それはいつか学校の国語の教師が授業中に生徒へ語つて聞かせたことであつて、私たちの右足の小指に眼の見えぬ赤い糸が結ばれてゐて、それがするすると長く伸びて一方の端がきつと或る女の子のおなじ足指にむすびつけられてゐるのである。ふたりがどんなに離れてゐてもその糸は切れない、どんなに近づいても、たとひ往来で逢つても、その糸はこんぐらかることがない。さうして私たちはその女の子を嫁にもらふことにきまつてゐるのである。私はこの話をはじめて聞いたときには、かなり興奮して、うちへ帰つてからもすぐ弟に物語つてやつたほどであつた。[9]

「右足の小指に眼の見えぬ赤い糸が結ばれてゐ」ると記されているが、この一節を含む「思ひ出」は作品集『晩年』に収録され、また、ほぼ十年後、右の字句を含む一節が小説『津軽』（昭和十九年）にもそのまま引用された。[10]今、赤い糸の伝説を記した「思ひ出」と『津軽』が書物を通じて普及したありさまを調べれば、次のとおりである。

「思ひ出」
昭和十一年　『晩年』（砂小屋書房）所収　＊初版五〇〇部？
十五年　『思ひ出』（人文書院）所収
十六年　『晩年』（砂小屋書房「第一小説集叢書」）所収
二十一年『晩年』（養徳社「養徳叢書」十五）所収　＊初版二〇〇〇部
二十二年『晩年』（新潮社「新潮文庫」）所収
二十三年『花燭』（思索社）所収
『二十世紀旗手』（浮城書房）所収
『ろまん灯籠』（改造社）所収
『晩年』（新潮社）所収
二十四年『きりぎりす』（筑摩書房「筑摩選書」二十五）所収

『津軽』
昭和十九年　『津軽』（小山書店「新風土記叢書」七）　＊初版三〇〇〇部

NII-Electronic Library Service

Meisei University

二十二年『津軽』（前田出版社）
二十三年『津軽』（小山書店「新風土記叢書」七）[11]

これによって「赤い糸」の話が一般に広く浸透していった状況をある程度は推し測ることができる。たとえ「赤い糸」の語の初見が太宰治「思ひ出」でなかったとしても、その普及に最も力があったのは、やはり太宰治であったと考えてよいのではないだろうか。

なお、太宰の中学校時代の後輩に当たる小野正文氏によると、青森県北津軽郡金木町の太宰治碑建立記念パンフレット（昭和四十一年五月三日）に「未発表資料」として相馬正一氏が太宰治の中学校時代の日記（大正十五年一月一日―三十日）の一部を紹介しており、その一月二十六日の記事に次のような字句がある。

先生の話「生まれた時に、もはや既に足にヒモが結ばれて居る」。
余、誰？

小野氏によれば、この「先生」は橋本誠一という教諭で、「目に見えない赤い糸の話は、下級生の私たちも聞い」たものであるという。[12] むろん、末尾の「余、誰？」は〈自分はいったい誰と赤い糸で結ばれているのだろうか〉との問である。太宰の言う「学校の国語の教師が授業中に生徒へ語つて聞かせた」云々は、そのまま信じてよいだろう。

ただし、注目すべきは、太宰が日記には「足にヒモが結ばれて居る」と記している点である。右足ではなく、単に「足」。小指とも記していない。しかも、糸ではなく、「ヒモ」となっている。按ずるに、橋本教諭は「定婚店」を踏まえて赤縄故事をほぼそのまま生徒たちに語り聞かせたのではなかろうか。「右」足の「小指」に赤い「糸」が結ばれているという「思ひ出」の設定は、太宰治が創作時に加えた改変のように思われる。もし、この推測が正鵠を射ているとすれば、「右」足はともかく、「小指」と「糸」の案出者は太宰治だということになろう。つまり、手の「小指」に赤い「糸」が結ばれているとする現在の赤い糸の伝説にかなり近づいたわけだ。この点から見ても、日本における赤い糸の伝説にとって、太宰治の果たした役割はきわめて大きかったと考えて差し支えあるまい。

もっとも、赤い「糸」の結ばれている部位は、依然として足である。「右」足の「小指」とはなっているが、とにかく中国の「定婚店」が記したとおり、足であることに変わりはない。先に紹介した鷗外も明確に「足」と記していた。ところが、御承知のように、現今の巷間に広まっている赤い糸の伝説では、結婚する男女の手（右手か左手かは不明）の小指に赤い糸が結ばれていると考えられている場合が多い。一体いつから「手」の小指に結ばれることになったのだろうか。

三

昭和四十年代には、高等学校の漢文の教科書に赤い糸の伝説の原話たる「定婚店」が採録されていた。尚学図書の新村出・輿水実［編］古典乙II『新選漢文二』（昭和三十九年四月検定済）五二―五七頁、『漢文二』（古典乙II、昭和四十二年四月検定済）八三―八八頁、古典乙II『新選漢文二』（昭和四十六年四月改訂検定済）八三―八八頁などに「定婚店」の全文が見える。また、同じく尚学図書の加藤常賢・前野直彬［編］古典I乙『新選漢文（全）』（昭和四十七年四月検定済）七三―七八頁にも「定婚店」が抄出されている。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

けれども、その後、指導要領が改訂されて国語Ⅰ・Ⅱの体制となり、古典Ⅰ乙という科目が消失したことにともない、漢文の教材が大幅に削除され、「定婚店」も教科書に採録されなくなった。[13] ここに、赤い糸の伝説が変形を加えられる可能性が生じたと見てよいだろう。太宰治の記した赤い糸の伝説が原話たる「定婚店」の拘束を離れて独り歩きを始めることになったわけである。なにしろ日本人の伝統的な教養の一角を占めてきた漢文の知識が衰退の一途をたどっていた時期であった（むろん、現在、日本人の漢文の教養が黄昏を迎えていることは言うまでもない）。たとえば、うら若き乙女たちが太宰治の「思ひ出」に記された赤い糸の伝説を読んでロマンティックな幻想を抱き、うろ覚えのまま、赤い糸の結ばれる部位を勝手に右足の小指から手の小指に変えて友人などに話したとしても、もはやその原話との食い違いを指摘する場が、教育の現場からも日常の場面からも消え去っていたのである。このあたりに、赤い糸が「手」の小指に結ばれることになった契機が存在したと考えてよいのではないだろうか。

もっとも、赤い糸が足ではなく手の小指に結ばれることになった背景には、いくつかの事情を想定することができる。本誌第一号の拙稿でも多少は言及したが、[14] 一つには、慕い合う男女を結びつける象徴としての赤い糸が足に結ばれるのでは、いかにも逃れがたい運命といった趣が強く、乙女たちにとっては印象が深刻すぎるのではないかと思われる。恋愛そして結婚を俗に言うロマンティックな範疇でとらえるとすれば、やはり足よりも手のほうがふさわしかろう。また、男が赤い糸について考える場合でも、小指を突き立てて恋人または情婦を意味する慣習に照らして、足よりは手の小指のほうがそれなりに説得力を持つ。一方、小指を絡み合わせて約束の印とする「指切りげんまん」の習俗も、なにほどか影響を及ぼしたことだろう。結婚を約束された男女の小指に赤い糸が結ばれているとなれば、まさに赤い糸を通しての間接的な「指切りげんまん」であるからだ。なにしろ、各種の古語辞典などによれば、この「指切りげんまん」と関連ありと覚しき「指切り」は、江戸時代、遊女が相愛の男に対し、誓約の証として手の小指を切断した行為であるという。もちろん、小指を切れば「赤い」血が出る。なにかしら江戸時代の記憶が現代の日本人をして手の小指から「赤い」糸への連想を働かせしめても不思議はあるまい。

さらには、ここで、視覚的媒体すなわち写真入り週刊誌やテレビなどの普及が、赤い糸の結ばれる部位を手の小指と設定するについて、大きな役割を果たしたのではないかと推測してみてもよいかもしれない。つまり、「二人は赤い糸に結ばれて……」などとロマンティックに恋愛を語ろうとする記事や番組で、そこに若い女性の足ならともかく、男のきたならしい毛むくじゃらの足でも映っていたら――しかも、どうやら水虫らしいなどということにでもなれば――これはもう雰囲気がだいなしになってしまうだろう。視覚的媒体における演出効果という点から見ても、やはり手の小指のほうがずっと好都合なのである。

そして、おそらく右に述べたような事情を最も典型的に表わしているのが、東京都原宿にある結婚式場、東郷記念館の流す例のテレビコマーシャルである。御記憶の方も多いだろう。母親が嫁ぐ娘に「結婚する相手とは、生まれたときから手の小指と小指を赤い糸で結ばれているのですよ」と教えさとす声の入ったコマーシャルである。同記念館に問い合わせたところ（平成七年十月十六日）、このコマーシャルはすでに十数年にわたってテレビで流しているものだという。一つの

NII-Electronic Library Service

Meisei University

コマーシャルばかり続けている裏には、広告製作費の節約という営業上の事情もあるらしい。しかし、これほど長期間にわたって同じコマーシャルを流しつづけているという事実は、それだけ好評を博していることの証明でもあろう。端的に言って、赤い糸の伝説は日本人になかなか受けのよい話柄かと見える。

四

今日、男女の出会いとくれば赤い糸という連想は、かなり日本人の脳裏に定着しているとみてよいだろう。事実、たとえば〈C'est étonnant... de voir combien les hommes et les femmes sont faits l'un pour l'autre〉などというフランス語も、「運命の糸で結ばれた男女を眼の前にするのはまさに驚きだ」と訳される。[15]「運命の糸」とはなっているが、これはおそらく赤い糸を踏まえた表現で、「赤い糸」では卑俗な印象になりかねないのを惧れた訳者が、「運命」の語を以て換えたものであろう。

もっとも、赤い糸という語をかなり自由に使った用例が存在するのもたしかである。たとえば、竹山道雄氏は「西洋史の中では、これが一すじの赤い糸のようにつづいた」[16]などと使っているし、また、酒井邦彦氏も「英和辞典は、日本の英語教育を貫く一本の赤い糸です」[17]などと述べている。このような「赤い糸」が、本稿で扱っている赤い糸の伝説と関係するものなのか、はたまたギリシア神話に見える例のアリアドネの糸などの連想から生じたものなのか、筆者にはよくわからない。アリアドネがテセウスに与えた糸は赤い色だったのか。

いずれにせよ、ここまで日本人になじんだ語であるにもかかわらず、各種の国語辞典が「赤い糸」を項目に立てていないのは遺憾である。もともと国語辞典は訓読表現に冷たい。「赤縄」の変形訓読語とも称すべき「赤い糸」を採録しないのは無理からぬ話かもしれぬ。しかし、おそらく赤い糸は、日本人の人生哲学にとって重要な役割を果たしてきた、そして現在も果たしている「縁」という観念を形象化したものである。大型の国語辞典が「赤縄」のみを立項して「赤い糸」を採録しないのは、片手落ちと言うべきだろう。

さて、最後に、赤い糸の伝説に対する現代の感覚を代表すると覚しき一文を紹介してみたい。昭和四十一年生まれのコラムニスト酒井順子氏の「赤い糸伝説の真実」と題する文章である。

自分が結婚する男性とは、小指と小指が赤い糸で結ばれている。これは誰もが聞いたことのある伝説でしょう。私は、これはてっきり「手の」小指同士が赤い糸で結んであるのだと思っていましたが、この前ある人が「足の」小指だと言い張ってきかず、言い合いをしたことがあります。でも、足の小指と小指が赤い糸で結んであるって、ちょっとマヌケだと思うんだけどなぁ。

ま、手か足かはどうでもいいとして、問題は「赤い糸」は本当に一本しかないのか、と言うことです。昔の人なら、「赤い糸は一本しかないものだから、大切にしなくてはならない」という話を信じることもできたでしょう。結婚は普通一回で、その結婚に何らかの不満があっても「赤い糸は一本しかないのだから」と、我慢した。

しかし、問題は現代です。〝そんなもん、一本くらい切れたって何本でも替えはきくでショ〟とばかりに、離婚・再婚は増えてきた。そして昔なら「赤い糸のお相手と早く会いたい」と思うの

NII-Electronic Library Service

Meisei University

が普通だった若い娘が、「私、そういうことはまだ先でいいんですぅ」と、糸を積極的にたぐらなくなった。まさに今は、赤い糸こんがらがり状態、なのです。

実は、赤い糸は昔からひとりにつき何本も結ばれていたのかもしれません。けれど先人たちは賢かった。「赤い糸は一本しかないから、それを大切にするように」と言い、またそれが信じられた。そし自由ではないけれど、安定した恋愛及び夫婦生活が営まれたのです。

でも、誰かがある時、パンドラの箱を開けるように「赤い糸は、いっぱいあるよ」という秘密をバラしてしまったのです。そして私たちは、たくさん恋愛したり、結婚しなかったりする快感を知ってしまった。もちろん現世にも「赤い糸は一本しかないから、私はそれを大切にする」と言う人もいます。赤い糸を何本も操っている人は、その人達を見て言うのです。〝何が楽しいのかしら〟と。しかし心では〝一本しかないって信じる方が、楽だったもしれないな〟と思うこともある。

糸が一本しかないと信じれば、一生その糸を手繰っていけばいいので、高望みさえしなければ、少なくとも普通には生きていけます。しかし、何本もあると知ってしまった人には、どの糸にしようか、はたまた糸を全部切ろうかという「選択」をしなければならないのです。それは糸の先に飴玉がついていて、アタリを選ぶという駄菓子屋にある遊びのように、とても選ぶのが難しい。たとえハズレの飴玉を引き当てても、全部自分の責任なのですから。

赤い糸は一本か、それとも複数本か。これは結局自分の思い込みの問題です。一本だと思うなら、一生そう思い続けなければ幸せになれないし、複数本だと思うのなら、自分でその中の一本を選びとる度量と責任を身につけなくてはならない。

そういう私も……、まだ迷っているところですが……。[18]

無粋な穿鑿は慎みたい。それにしても、「この前ある人が〈足の〉小指だと言い張ってきかず、言い合いをしたことがあります。でも、足の小指と小指が赤い糸で結んであるって、ちょっとマヌケだと思うんだけどなぁ」か。どこにも「赤縄」の文字が見えず、「定婚店」の話も登場しない。すでに太宰治の「思ひ出」も遠く記憶の彼方に消え去っているようだ。漢学の素養が黄昏を迎えた現今の「赤い糸の伝説」観とはこのようなものである。もっとも、唐代に記された一説話が伝説と化し、一千数百年の時を越えて、東の島国で幸せを夢みる乙女たちの結婚観になにがしかの影響を与えているのだから、「定婚店」の話も「赤縄」の語も、以て冥すべしと言うべきかもしれない。

【注】

(1) 服部誠一『東京新繁盛記』(聚芳閣[版]、大正十四年)「新劇場　附新富坊守田座」一五九―一六〇頁。

(2) 明治文化研究会[編]『明治文化全集』第二十一巻「時事小説篇」/付「続翻訳文芸篇」(日本評論社、昭和四十二年)所収。なお「仇」は現代の我々が訓ずれば「あだ」と濁音で読むが、平安の昔から江戸中期ごろまでは「あた」と清音で口にされていたという。これは本学の島田良二教授から御教示いただいた。ここに記して謝意を表す。

(3) 同右書/五七三頁下。

(4) 同右書/五七六頁上。

(5) 同右書/五八五頁下。

(6) 岩波書店『鷗外全集』第十八巻/二八一頁。

(7) ちなみに同『鷗外全集』第三十八巻/八二頁に『赤縄奇談』が見える。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

(8) 本誌第一号／七四頁上。講演「旅行と歴史」（大正十三年六月二十三日、原題「歴史は何の為に学ぶ」）。ちくま文庫『柳田國男全集』第二十七巻（筑摩書房、平成二年）一七六頁。

(9) 本誌第一号／七四頁上―下。『太宰治全集』第一巻（筑摩書房、昭和四十二年）四七―四八頁。

(10) 同右全集／第七巻（昭和四十六年）一一頁。

(11) 山内祥史［編］『太宰治』（「人物書誌大系」七、日外アソシエーツ、昭和五十八年）による。

(12) 小野正文「中学生時代」／「国文学〈解釈と鑑賞〉」平成五年六月「評伝太宰治」特集号／四二頁下―四三頁上。

(13) 「新しい漢文教育」第十号／八九頁上に見える堀江忠道氏（都立高島高校）の発言部分を参照のこと。

(14) 本誌第一号／八〇頁上。

(15) 橋本克己［訳］『印象派の人びと　ジュリー・マネの日記』二七頁（中央公論社、平成二年）。

(16) 竹山道雄『歴史的意識について』一三八頁（講談社学術文庫、昭和五十八年）。初出は「ユダヤ人焚殺とキリスト教」（「言論人」昭和五十四年二月）。文中の「これ」は、マルティン・ルターが抱いていた「ユダヤ人は嘘つきである」との偏見を指す（竹山氏によれば、この偏見は『ヨハネによる福音書』八章四十四節に見えるイエスの説教に由来するという）。

(17) 酒井邦彦『どうして英語が使えない？――「学校英語につける薬」』／「はじめに」三頁（ちくまライブラリー87、筑摩書房、平成五年）。同書五二頁にも同様の一文が見える。

(18) 「MORE モア」一九九四年六月号（通巻二〇四号、集英社）三六六頁「特別寄稿」欄。

追記

一　本誌第一号の拙稿八〇頁下の（12）で西湖の月下老人祠の対聯を紹介したが、銭剣夫［主編］『中国古今対聯大観』（上海文化出版社、一九九三年）二七二頁によれば、「月老祠」には、もう一つ次のような対聯も記されているという（後半のみを引く）。

一百年繫定赤縄、願穠李夭桃、都成眷属、情天不老月長圓

二　本誌第二号の拙稿で「二　日本の類話――その一」（三五頁下―三六頁上）として紹介した『今昔物語』巻三十一第三の前半と同工異曲の説話が、増穂残口『艶道通鑑』（正徳五年［一七一五］）巻一（神祇の巻）十五「釈の浄蔵の段」にある。浄蔵（八九一―九六四）は三善清行の子で、天台宗の名僧として知られる。今、その話の関係部分を簡略に紹介すれば次のとおり。

浄蔵は少年のころから仏教者として名高く、十五歳のとき出雲大社にこもった。折しも十月の初め、神々が出雲に集まって各地方の男女の縁を取り結ぶ。話が自分の故郷の縁結びに移ったので、浄蔵が聞き耳を立てていると、なんと神々は自分とある娘を結婚させるのだと言う。仏教者にとって、結婚はけがらわしいものでしかない。浄蔵はすぐに都に帰り、召し出されて勤めにはげんだが、ある八歳ほどの少女が媚を売るような真似をする。そこで浄蔵は、これこそ出雲の神々が自分と結婚させるつもりの女に違いないと、短刀で少女を刺し殺して逃走し、二十年以上も都に帰らなかった。

その後、浄蔵は久しぶりに都に帰り、重く取り立てられた。天皇は、浄蔵を結婚させてその血を受けた後継者を得ようと、多数の美しい女性を世話役に付けた。いつしか浄蔵もそのなかの一人と深い仲になって二人の子をもうけたが、ある晩、妻の乳房の下に大きな傷跡があるのに気づいた。聞けば、幼いとき修行者に刺されて死にかかったのだと言う。浄蔵はこれぞ他生の縁と知り、ますます妻をいつくしむようになった。

なお、『艶道通鑑』を収める『近世色道論』（「日本思想大系」60、昭和五十一年、岩波書店）二三〇頁の頭注によれば、この話の原拠は沙弥玄棟［編］『三国伝記』（応永十四年［一四〇七］？）巻六第九話かという。ただし、同工異曲とはいえ、相違する箇所が少なくない。今、その関係部分の梗概を『大日本仏教全書』第九十二巻「纂集部一」（財団法人鈴木学術財団／講談社、昭和四十七年）二七八頁中―二七九頁上に見える本文に基づいて記す。

浄蔵は父の三善清行から儒学を教わったが、自分が成人したとき、ある公家の娘と結婚するよう父が取り計らったことを知った。浄蔵は仏門に帰依する意志を固めていたため、結婚するわけにゆかぬ。そこで、相手の女性を殺してしまおうと、乞食になりすまし、わずか三歳の相手の女性が乳母に抱かれて庭に出たところを襲って剣で刺し、密かに家にもどって、これで煩悩を断ち切ることができたと思った。

後年、宮中で重く取り立てられた浄蔵は、内裏から差し向けられたある女房と深い仲になって二人の子をもうけたが、その女性の身体に傷跡があるのに気づいた。聞けば、三歳のとき乳母に抱かれて庭で花を見ていたところ、一人の乞食がやってきて剣で刺したのだと言う。浄蔵は、その女性こそ自分が殺そうとして刺した幼い女の子だと知り、前世の業は断ちがたいものだと悲しんだ。

三　本誌第三号の拙稿五〇頁上―下の（追記）三に記した青木鶯水『御伽百物語』（宝永三年［一七〇六］）巻二所収「宿世の縁」を梗概によって紹介しておく。

京都の大通寺という由緒ある寺で、元禄十四年（一七〇一）に宮社が改築された。次々に参詣客が訪れたなかに、花垣梅秀という若い歌人がいた。梅秀が新たにできた池のところへ

NII-Electronic Library Service

Meisei University

行ってみると、弁天を祀った祠がある。と、梅秀の足もとに女性の筆跡で歌を記した短冊が風に乗って落ちてきた。その美しい筆遣いに魅せられた梅秀は、なんとか歌を記した女性に会いたいものだと、弁天に願掛けをすべく七日参りを始めた。

満願の七日目の深夜、梅秀が寺にこもって祈っていると、門の外で案内を求める声がする。入ってきたのは、七十歳くらいの翁であった。すると、弁天を祀った祠の扉が開いて稚児が姿を現わし、翁に「弁天様は、かなわぬ恋を願う者を憐れとおぼし召して、そなたを招いた。宿世の縁があれば、よろしく引き合わせてもらいたい」と言った。翁は袂から赤い縄を取り出し、隠れ見ていた梅秀のほうに向かって引き結ぶような動作をしたあと、その縄を灯明の火で焼き、手招きをした。と、十四、五の美しい娘が現われ、梅秀のそばに寄り添った。稚児によれば、その娘こそ弁天が梅秀のために月下の老を召し寄せて引き合わせた意中の女性であるという。そして、稚児も翁も娘も姿が見えなくなった。

ふと気づけば、夜が明けようとしている。梅秀は帰途についたが、その道すがら、寺で会った娘に再び出会った。喜んだ梅秀が声をかけると、娘はそのまま着いてきた。当初、梅秀は人目を恐れたが、だれも娘について尋ねようとしない。そこで夜ごと情を交わすうちに、娘が諸芸に通じ、何事もじょうずなことから、梅秀はすっかり気に入ってしまった。

ある冬のこと、梅秀は街角で呼び止められた。請われるまま、ある見知らぬ家に入ると、その家の主人はこう言った――「私の十五歳になる一人娘が幸せに結婚できるようにと弁天様に祈り、娘に歌を書かせた短冊を奉納したところ、ある夜、弁天様が夢に現われ、〈すでに娘はある若者とめあわせた。この冬にやってくる〉とお告げをくださいました。心もとなく思っていると、昨夜、再び弁天様が夢に現われて、〈明日、例の若者がこのあたりを通る。呼び入れて婿にせよ。必ず出世する若者だ〉とおっしゃいます。そして、あなた様の人相や年齢やらを詳しく教えてくださいました」と。梅秀は例の娘のことが気にはなったが、とにかく会ってみようと奥の間に入った。すると、なんと、そこにいたのは例の娘その人であった。それまで情を交わしていたのは、弁天が梅秀を憐れんで夜ごと通わせていた娘の魂だったのである。

四

朝鮮半島やヴェトナムにも月下老人の登場する「定婚店」の話をはじめ、赤い糸の伝説が伝わっていたようだ。たとえば『韓国漢字語辞典』巻二（ソウル・檀国大学校出版部、一九九三年）「月老（姥）」項によると、『九雲夢』四に「両人之縁、天已定之、神亦知之、月老之約、肆可卜矣」、『玉楼夢』第四回に「天送緑林豪客、成赤縄月姥之縁」などとあるという。いずれも金東旭『朝鮮文学史』（日本放送出版協会、昭和四十九年）一九三頁に謂う「〈夢〉字小説類」で、十七世紀末から十八世紀にかけての作品である。一方、「越南奇逢事録」（『越南小説漢文小説叢刊』第二冊「伝奇類」所収、台湾・学生書局、一九八七年）にも、「不外赤縄做主」（一九〇頁）「世途難過、人事多磨、月下翁！月下翁！説之結成委曲」（一九五頁）「不図山林蛮獠、有此奇逢、一段因縁、又何必牽絲拾葉」（二〇七頁）などとある。同書一八三頁によれば、「越南奇逢事録」は阮朝（一八〇二―一九三六）の作かという。

五

平成七年二月二十六日夜、北京日本学研究センター主任の厳安生教授の案内で北京市の市街区の南に位置する天橋の芝居小屋「天橋楽」を訪れたとき、若い男女の結婚を話題とする最初の笑劇に、長い白鬚をたくわえた月下老人が登場した。ただし、赤い糸が結ばれる場面は出てこなかった。もしかすると、赤縄故事の「赤い糸」にこだわるのは、日本人の同故事の受容に見られる一つの特徴なのかもしれない。

NII-Electronic Library Service